

社長と秘書の秘めたる執愛

プロローグ

それは、地方の都市開発事業の式典でのこと。ホテルのガーデンパーティーの会場で、事件は起きた。

雲ひとつない美しい青空の下、庭園の隅には秋バラが咲き誇るアーチが並んでいる。バラにうつとりと見惚れていて、そこに潜んでいる人影に気が付くのに遅れた、その直後のことだ。太陽の光を反射した白刃が目の前に迫ってくる。

悠梨は咄嗟に動けなかった。危ない、と声を出すことも。

横から伸びてきた大きな手に手首を掴まれ、引っ張られる。悠梨の身体は、大きな背中に庇われた。

「社長っ……っ！」

自身が勤める会社の社長である、砥上の背に守られて、状況はよく見えなかった。

耳をつんざくような悲鳴が上がり、嫌な予感にどっと心臓が大きく跳ねる。

一度は警備員に止められた男だったが、制止を振り切ってふたたび砥上に突き進んでくる。

まるでスローモーションやコマ送りの画像を見ているようだった。心臓が止まりそうになる。

けれど次の瞬間には、砥上は自分の手で男の手首を掴んで取り押さえていた。

「砥上社長、お怪我は!?」

パーティを主催する取引先の役員が砥上に駆け寄ってきたときには、すでに犯人を警備員に引き渡した後だった。

「ええ、私は問題ありませんが……」

砥上は苦虫を噛み潰したような顔をしていたが、すぐに悠梨を振り向いた。

「朝羽、平気か」

声をかけられた途端、足元がよろめいた。砥上の両手が伸びてきて、悠梨の肩を掴む。その腕に支えられて立っているような状態だった。

「はい、大丈夫で……」

返事をする声がまともに出なかった。小刻みに手が震えているのがわかる。

刃物を持って人が襲ってくるなんて初めての経験で、これが恐怖だと理解する前に身体が震えて力が入らなかった。

「よ、よかったです、社長が、ご無事で……」

会場は騒^{さわ}めいている。ガーデンパーティは間違いない中止になるだろう。

この後は警察が来て、おそらく聴取などに協力しなければならぬ。

秘書の悠梨にできることは、この後の砥上のスケジュールを急ぎ調整することと、それから。

頭だけはしっかりと働いている。だが、身体と口が上手く動かない。仕事用のタブレットをバツ

グから取り出してスケジュールの確認をしようとしたが、手に力が入らず操作が進まない。

震える悠梨の手を、砥上の大きな手が包み込んだ。

「焦らなくていい。まずは落ち着け」

砥上の手の温もりが、悠梨を温める。身体に随分と力が入っていたことに気が付いた。ふるつと身体が大きく震えて、それから徐々におさまってくる。

「大丈夫だ」

もう片方の手で安心させるように悠梨の肩を一度ぐつと掴み、強張りが解けた様子を確認すると、砥上はふたたび主催者と話を始めた。

悠梨も状況を把握するため、深呼吸をしながら砥上たちの会話に聞き入る。どうやら、都市開発の反対派に恨みを買ってしまったらしい。

主催者が事後処理のために離れていくと、砥上は忌々しげに舌打ちをした。

事業の中心となっている建設会社の対応が、地元からの反発に追いつけていなかった。開発事業のため、土地の持ち主ひとりひとりに対し、砥上はしっかりと心を砕いたはずだ。なのに、結局はその人たちから直接恨みを買うのは不動産売買に関わった砥上になる。

「……静観するつもりだったが、そうもいかなかったな」

「理解が得られなければ、また同じことが起こるかもしれません。社長が直接交渉の場に出られて穏便に進める方が、双方のためかもしれませんね」

反対派にも、それだけの思いがある。もしかすると、砥上や悠梨が把握していた以上に傲慢に抑

えつけた部分もあったのかもしれない。

地元の関係者対応を引き受けていた建設会社は、最近代替わりしたばかりのまだ若い社長の陣頭指揮だった。

「これだから二代目のボンボンは。なあ？」

砥上は冗談っぽく笑って、悠梨に同意を求めて来た。

「……社長だってボンボンではないですか？」

「言ったな。俺はそこまでボンボンではないつもりだが」

軽口を叩きながら、少しずつ気持ち落ち着いてくる。砥上がわざとそうしてくれているのだと、悠梨にはわかった。

薄れていく恐怖の代わりに、トクントクンと刻まれる甘い鼓動。

好きになっただけはいけない人だ。何より、悠梨は欠片も相手にされる可能性がない。

わかっているのに砥上の人柄に惹かれ続けたこの一年の、これがトドメだと悠梨は自覚してしまつた。

悠梨の手の震えがおさまるまで、砥上はずっとその手を握ってくれていた。

第一章 まずは、指先

三年前のことだ。朝羽悠梨は、自分が社長秘書に取り立てられたときのことをよく覚えている。

大学を卒業してから大手不動産会社に就職して、総務課に二年勤め、三年目の春。

秘書室に異動になったばかりのその日、遠目か社内報でしか見たことがなかった砥上社長の前に通された。

以前から、社内の女性社員が社長の姿を見て、まるで芸能人に会ったように騒いでいたのを悠梨は知っている。悠梨自身、社内報の写真を見たときは確かにモデルみたいだと思った。

けれども、相手は社長、しかも日本有数の不動産会社の社長なのだ。それこそ芸能人並みに遠い存在で、当然『かっこいい』と眺める以上の感情は持てるわけがない。

遠くで見かけては眼福、眼福と拝んでいたその人物を、いざ目の前にして悠梨は圧倒された。

まず驚くほどに砥上は背が高い。彫りが深い目鼻立ちと切れ長の目の形に、黒い瞳と黒髪は一見硬く冷たい印象を抱かせる。それを口元に穏やかに浮かぶ笑みが和らげて、優しい雰囲気漂わせている。柔らかなライトグレーのスーツがよく似合っていた。

社長の横には前任の秘書が立っていて、こちらもすらりと背が高い。眼鏡をかけた綺麗な女性で、赤い口紅が華やかに、それでいて上品に見せていた。幼い顔立ちがコンプレックスの悠梨では、こ

うはいかない。唇ばかりが目立って見えて恥ずかしく、絶対に使わない色だ。ふたりの立ち姿は絵に描いたようにバランスが取れていた。花に例えるなら、黒と赤のバラだ。こんなふたりと雑草のような自分がなぜ、向き合わなければいけないのか。

冷や汗をかきながら背筋を伸ばして立っている悠梨の耳に、心地よい低音ボイスが響く。

「なるほど。適任だ」

「そうでしょうか？」

砥上の言葉に、女性が笑いを含みながらも凛とした声で答えた。

「え……あの？」

意味がわからず首を傾げる悠梨を見て、砥上の黒い瞳が細められる。柔らかな微笑みなのに、どことなく意地悪な印象を受け、悠梨はつい眉を顰めてしまった。

——あ。しまった。

正直に感情が顔に出てしまうのは、おそらく秘書としてはいただけでない。しかも相手は社長なのだ、気付いて表情を取り繕ったがもう遅い。

咎められることはなかったが、砥上は小さく噴き出した。

「食指が動きそうにない。仕事に集中できそうだ」

一瞬、何を言われたのかわからず、固まった。悠梨の頭の中を、砥上社長の放った言葉が二度、三度とリピートされる。

それから、意味を理解してじわじわと顔が熱くなった。

——ど、どういう意味よーっ？ 子供っぽいつて言いたいなの!?

握りしめた拳をふるふると震わせたが、実際わかりやすく感情を表に出してしまったのは悠梨だから、返す言葉が見つからない。いや、それよりも、だ。

入社して間もない頃に小耳に挟んだ噂を思い出す。女癖が悪いとは聞いていたが、どうやら真実だったようだ。『食指が動くタイプの秘書』では困るということ、そういう意味だろう。

そして仕事に集中できるように選んだ秘書が悠梨ということは、つまり悠梨は社長のタイプではないという意味だ。

なんだそれは。別に手を出されたいなんてことを望んではいないのに、なぜか悔しい。一方的に「残念な女」認定されたような気がする。失礼な。

砥上の隣には、口元を押さえて美しく微笑む赤いバラこと、前任秘書の貝原が立っていた。

モデルのようなスタイルの彼女に比べ、確かに悠梨は小柄で童顔だ。その上、着やせするせいか、多少はある胸もスーツに身を包むとすっかり隠されてしまう。染めてもない焦げ茶色の髪をひとつにまとめ、前髪を横に流すだけという飾り気のない髪型で、いまだに新入社員か就活中の大学生に見られることがあった。

——彼女とは、仕事に集中できなかったってこと？ こんなフェロモン駄々洩れ美人と比べないでほしい。

ひくつと頬が引きつる。屈辱感と敗北感に同時に打ちひしがれながらも、悠梨は持ち前の反骨精神でどうにか顔を俯かせずに踏みとどまった。

「ご希望に添えますように、業務に邁進まいしんさせていただく所存です。社長のお人柄が『仕事しか興味のない堅物』と新たな噂になりますように」

——仕事するのに、社長のタイプかどうかは関係ないですよね！

社長を見据えて目でそう訴えつつにっこり笑ったそのとき、砥上の目が少しだけ、面白いものを見つけたかのように輝いた。

怒るか泣いて逃げるとでも思われていたのだろうか。おあいにく様だ。女遊びなんてする暇がないくらい、仕事を詰め込んでやる。

笑顔の裏でそう悪態を吐いているのを知ってか知らずか、砥上は一步悠梨に近づく。何が可笑しいのか楽しそうに笑って、悠梨に右手を差し出した。

「お手柔らかにお願いしますよ」

美しい微笑みにぞくりと背筋を這うものがある。これ以上侮あなづられてなるものかと、どうにかそれは押し隠し、しっかりと砥上の手を握り返した。

それから一か月の引継ぎ期間、悠梨は貝原から仕事を教わり、正式に砥上社長の秘書となった。

貝原の、最後の出勤日。彼女とふたりで取ったランチの場で、悠梨は冗談交じりに初日のことを口にした。自分が選ばれた理由が『社長の食指が動かないタイプだから』というのはいくらなんでもあんまりだ、と。せめて一言、文句くらいは言ってもいいはずだ。

すると、貝原はきよとんと目を見開いたあと、お腹を抱えて笑いだした。

「違うわよ、あれは半分冗談！」

「半分……」

つまり、残り半分は本気だということでは、という突っこみはひとまず呑み込む。

「ちゃんとあなたの能力を見て決めさせてもらったわ。去年、新事業のレセプションパーティがあったでしょう。あのときのあなたの仕事ぶりを見ていたの」

「はい、もちろん覚えてますが……」

悠梨は首を傾げた。パーティでは、その日の会場の料理や飲み物の手配を担当していた。当日ももちろん会場に控えていたが、所詮裏方だ。目立ったことはしていないはずだった。

「細やかに、速やかに、さりげなく、的確な対応を。それができなければ秘書ではないの。あのときの朝羽さん、多少焦りは見えたけど細やかな気遣いがちゃんとできて、しかも出しやばることなく裏方に徹してた。秘書に向いてると思ったのよ」

貝原の言葉に悠梨はばちばちと瞬まばたきをしたあと、徐々に綻ほほむぶ唇を咄とっさ嗟に噛みしめた。

気付いてくれる人がいたことが、嬉しかった。

本当に大変な一日だった。初めての経験だったのに、招待客の中に重い食物アレルギーの者がいたり、手配していたものが事故で遅れたりと突発事項が複数あり、その場で即座に対応を考えなければいけないことが続いた。

頭の中はパニックに陥おちりながらも、どうにかそれは顔には出さずにいられたはずだ。その場を乗り切ったときは心の底からホッとしたのだが……その出来事が、今回の抜擢はってきに関わっていたとは

まったく気付いてなかった。

自分の仕事を誰かが、ましてや社長秘書が見ていたとは思ってもよらなかったし、それどころか、直属の上司からも^{おぼろ}労いの言葉もなかったのだ。

「……恐れ入ります」

気恥ずかしい気持ちで目礼する。

「ですが、それだけで選んでいただけたというの何か……理由が弱い気もするんですが」

「まあね。ほかにも候補はいたけれど……資質の問題よ。教えたならある程度誰にもできることと、そうでないことがあるのよ」

「そうなんでしょうか……頑張りますが、もちろん」

悠梨にはいまいち実感が湧かないことだったが、つまり貝原の目から見れば秘書としての資質があると判断された、ということだ。

それならば、自分ができることを精一杯やるしかない。それに、社長のタイプではないからという理由だけで^{ばつ}抜擢されたわけではないということが知れたのはよかった。

「後はお願ひね。分刻みのスケジュール管理の上、色々と手のかかる人だけれど……上司として信頼できる人よ」

そう言うて話を締めくくる気配だったのだが、貝原は思い出したように追加事項を口にする。

「あ、あと、あの見た目だけれど、くれぐれも職場恋愛なんて夢は見ないように。上司と部下で恋愛なんて、面倒くさいことしか待ってないから」

「ご心配なく、ありません」

いや本当に、ありえない。わざわざそんな忠告があるくらいだ、前例でもあったのかもしれないが悠梨には不要だ。あんな失礼な初対面で恋になど発展するものか。

「そうかしら」と貝原は意味ありげに笑う。悠梨は「そうです」と少々ムキになって返事をした。自分が『社長の食指が動かない』タイプであるなら、悠梨にしたって社長は決して好きな男性のタイプには当たらない。

自分は真面目に仕事がしたい、それだけだ。社長の好みの女性である必要はまったくない。仕事で認めさせればいいのだと、反骨精神に火が点いたのだった。

そして三年が経過した現在。二十七歳になってもいまだ童顔の悠梨は、当初の誓いどおり社長の毒牙にかかることなく、固く貞操を守っている。もちろん、狙われてすらいないのだが。

コンコンとドアをノックする。この向こうは、砥上の自宅の寝室だ。

「社長、起きてください。社長！」

十センチほどの隙間だけドアを開けると、砥上の微かな唸り声が聞こえた。

「あと一時間半で会議の時間です。早く身支度を整えてください」

声だけかけて中には入らず、キッチンでコーヒーマーカーにスイッチを入れる。その間に砥上は顔を洗いスーツに着替えてから、リビングに入ってくる。

朝が弱い砥上のために、起こしに来たついでに朝食を準備するのがすっかり日課になっていた。

ダイニングテーブルの上には、サンドイッチの包みを置いてある。悠梨がここに来る途中に、パ
ン屋で買っておいたものだ。ブラックコーヒーを注いだカップをその横に並べたところで、砥上の
少し掠れた低い声を聞く。

「おはよう」

髪を整え、ぴしっとスーツを着こなした砥上がダイニングに姿を見せた。装いには隙がないが、
まだ眠いのだろう。だるそうに眉根を寄せ、片手でゆったりと前髪をかきあげるさまは、壮絶に
色っぽい。

「おはようございます。もうあまり時間がありませんので、お早く」

「ああ、わかっている。今日の予定は？」

くあ、と欠伸を噛み殺して砥上は目尻に涙を滲ませる。仕事モードにまだ入りきれない彼の素顔
は、ちよいちよいと悠梨の母性本能を刺激するのだが……三年も経てば素知らぬフリをするのも上
手くなった。

いつもの場所に座った社長に一札する。テーブルの隅に置いていた仕事用のタブレットを手に取
ると、今日一日のスケジュールと連絡事項を順に読み上げていった。

最初は、秘書といえどもここまで踏み込んではいなかった。朝、自宅まで起こしに行くなんてい
くらなんでも秘書の仕事ではないはずだ。

しかし、放っておくと砥上は会社で顔を出すのがいつもスケジュールギリギリで、顔色も悪い。
寝不足が慢性化して朝起きるのが極端に苦手らしい。

深夜に時差のある海外の取引先と、電話連絡やネット会議に対応しているためだ。もちろん、そ
れだけが理由でもないだろうと悠梨は思っているが。

過密スケジュールの合間を縫ってその時々恋人と逢瀬はしているようだったが、悠梨が朝に起
こしに来て女性と鉢合わせたことは今のところない。

最初、砥上の寝不足は女性と遊んでばかりいるからだと思込んでいた。秘書として独り立ちし
てすぐに気が付いたけれど、まだよく知らないうちは偉そうなことを言ってしまった。

『夜遊んでばかりいないでちゃんと寝てください！ お仕事で疲れているんですから！』

『朝羽は知らないのかな。肌で癒されることもあるんだよ？』

『セクハラで訴えますよ』

このときに、砥上がちゃんと教えてくれたらよかったのに。

いや、秘書なんだからもっと早く気つくべきだったのか、と後悔した。

朝出勤すると、前日は保留だった案件が動き出していたり、社長の裁可待ちが減っていたりする
ことが続き、それで砥上が自宅で仕事をしていることに気付いた。秘書として引継ぎを終えてから
ひと月も経過してしまっていた頃だった。

夜遊びしているのだと誤解していた申し訳なきで、情けない顔をして謝る悠梨に、砥上が言った。
『だったら、君が起こしに来てくれない？』

意地悪な顔をするでもなく、軽く笑って流すような軽口だったが、それは落ち込む悠梨を気遣っ
たものだと思わってくる。

『かしまりました』

一も二もなく頷いた。本当は冗談のつもりだったのか、砥上はぼかんと驚いた顔をしていたが。昼間の仕事量を知っている悠梨からしたら、笑いごとではない。過労で倒れられては困るのだ。本当なら、夜は早めに帰って寝る、これが一番だ。しかし砥上の立場上、そうはいかないことが多い。

朝の寝起き問題をサポートしつつ、こまめに休息できるようわざと予定の合間に微妙なインターバルを置き、休める場所がないときはホテルを手配するなどして、休息時間を作るようにした。以降、悠梨にとって最重要事項は、砥上の目の下のクマが少しでも改善されているかどうか、これに尽きるようになる。

「……今日の予定は以上です。変更なしでよろしいですか？」

「ああ、それでいい」

連絡事項を伝え終えると、タブレットをバッグにしまった。砥上はサンドイッチを平らげ、コーヒークップを口元に運び香りを楽しんでいる。

「社長、あと十五分ですよ」

「十五分もある。君も少し座ってコーヒーでも飲まないか。就業時間外の、しかも自宅でこんな風にひとり座っていると、暴君にでもなったような気になる」

「……あながち間違ってもいないと思いますが。たまに独裁的ですよね？」

「独裁と暴君は違うし、聞き捨てならないな。俺はそんなに横暴か？」

軽口を叩いてから、お言葉に甘えて悠梨はキッチンに向かった。自分のコーヒーを淹れて戻り、砥上の向かいの椅子に着く。

沈黙の中、ほんの少しの居心地の悪さに広々としたリビングルームを見回す。ペランダの幅いっぱいにある大きな窓からは、秋らしく薄い色の青空が広がっていた。

テレビもつけない静かな朝。この時間を砥上と一緒に過ごすのは、自分にとってはおちよつとした褒美のようなものだ。

コーヒークップを持ち上げ口を付けると、さりげなく砥上へ視線を向ける。無表情だと冷たく見えるほどに整った顔立ちに、つい見惚れてしまう。

砥上は今年で三十二歳になるが、世界中の大企業と渡り合う堂々とした様子は、同年代の男性とは比べられないほどの存在感があった。

社会に出て働き出してからまだ数年、しかも男性への免疫があまりない悠梨が、敬意から憧れへと感情を変化させていくには十分な要素が、彼には備わっている。

その上、砥上は悠梨がまだ慣れない頃、それとわからないようにいつも手助けしてくれた。取引先への対応など、さりげなくヒントを会話の中に織り交ぜて、だ。

最初は膨大な仕事量についていくのに必死になるばかりで、まったくわかっていなかった。気付いてしまえば、仕事のできない自分の不甲斐なさで頭がいっぱいになる。気遣いの細やかさ、さりげなさを買われて砥上の秘書に取り立てられたはずなのに、これでは逆だ。砥上に気遣われることで、教えられている。

落ち込む悠梨にまたさりげなく、言葉をくれたのも三年前の砥上だった。

『人というのは、自分に余裕があるからこそ、心配りや優しさを他人に向けられるもんだ。無理があれば互いに苦しい』

『……はい？』

仕事を終えて執務室から退室する前に、砥上から突然振られた会話だった。最初は意味がわからず戸惑ったが、続いた言葉にはっとした。

『最初は余裕がなくて当たり前だ。無理するよりはじっくり仕事に慣れてくれた方が助かる』
気付かれている。焦っていることにも、落ち込んでいることにも。

——この人には、かなわない。

そう思うと、すっと肩の力が抜けた。

『社長は氣遣ってくださるじゃないですか』

『俺は余裕があるからな』

つい拗ねた口調になる悠梨を、砥上は軽く笑ってあしらう。

——本当に、かなわない。

どこまでも頼りになる上司に白旗を上げた。同時に、ぎゅっと胸の奥を掴まれたような、正体不明の感情に襲われる。

息苦しくて、心の奥が温かい、この感情はなんだろう、深く考えようとするれば嫌な予感がした。

——その予感的中したと確信したのは、二年前だったか。いや、トドメを刺されたと言うべきかもしれない。地方の都市開発事業の式典で、砥上が刃物を持った男に襲われた。

あのとき、犯人の目は真直ぐ砥上を向いていたのに、彼は咄嗟に悠梨を背中に庇った。

結局砥上も怪我ひとつなく済んだのだが、その夜は事件で時間が押したからと、夜通し執務室に閉じ込められて仕事をさせられ、疲れ切ったところをソファで寝かされた。その間、砥上も同じ執務室で、起きて仕事をこなしてくれていたのだが。

事件直後のことだ、犯人はすぐに取り押さえられたものの、夜、ひとりになるのが怖かった。自分にはなかったとはいえ、刃物を向けられたのだ。

砥上は悠梨が怯えていることをわかっていたから、敢えて徹夜してずっと傍にいてくれたのだ。その後、事件の原因となった反対派への対応に砥上自らが立った。さすがに、犯人を無罪放免というわけにはいかなかったが、こちらにも非があることを認めたくえで誠意を示した。景観を損ねないようにするといった開発面での条件を定め、完成するまで逐一報告すること、新しい土地でのサポートなどを申し出て解決へと導く。

砥上の人情味のある対応と語り口調は鮮やかなもので、険しい表情を浮かべていた人たちも気が付けば溜飲を下げ、その言葉に聞き入った。その背中を見つめて、零れた熱い吐息に観念した。

憧れと、尊敬と、それに確かに混じる恋慕。

落ちるべくして、落ちた恋だった。

おまけに毎日その有能ぶりを見せつけられたら、もう他の男性に目を向けられるわけもない。

かといって、悠梨が砥上から見て恋愛対象外なのは最初からわかりきっていること。決して知らないよう隠すよりほか何もできず、それを今も継続中だ。

何しろ最初に貝原からガツンと太い釘を刺されているのだ、砥上を好きになつてはいけないと。

『社長の食指が動かないタイプ』を秘書に宛がったのは、そういうことだ。

大体砥上は無駄に色気を振りまき過ぎだ。八つ当たり気味にそんなことを思いながらも、表情は平静を保つ。三年で身につけた技だ。このおかげで業務に支障をきたさずに済んでいる。

いつそ結婚でもしてくれたら諦めがつくだろうに、彼は恋人を作ってもそれ以上進展する様子はないまま別れてしまうのが常だった。

ため息を呑み込み、そつと砥上から視線を外した。気持ちを隠して横顔をこっそり見つめるこの時間を、どれだけ大事に思っているか砥上は気付きもしないだろう。でもそれでいい。気付かれれば、こうして朝、起こしに来ることもできなくなる。いや、秘書ですらいられなくなってしまう。

「社長、そろそろお時間です。間に合わなくなりますよ」

悠梨は腕時計で時間を確認し、腰を上げる。砥上はまだ怠そうに椅子に座ったまま軽く伸びをした。

「本当に、朝羽は固いな。ちよつと遅れるくらいの方が、社員のみんなが伸び伸び発言できて喜ばれるんだが」

朝の砥上はいつもこんな様子だが、会社に入れば一分の隙もない立ち居振る舞いになるのだから、さすがといったところだ。

「何を言ってるんですか、社員に示がつきません。ほら早くしてください」

急かすようにコーヒークップを片付ける。キッチンで水洗いして食洗機に入れていると、しみじみとした口調で砥上が言った。

「朝羽はいい嫁さんになりそうだ」

悠梨の胸はちくりと痛む。その痛みを、打ち消すように悠梨は笑った。

「社長もご結婚されたらいかがですか。そうしたら私の仕事も楽になります」

というより、社長が結婚してくれない限り、悠梨にはできそうもない。本当に、早く相手を決めて結婚して自分にとどめを刺していただきたい。しかしそんな思い空しく、当の本人にはまるきりその気がないようだ。

「結婚、ね。考えたこともないな。相手もいないし」

ひょいっと肩を竦めた様子に、酷い人だと呆れた。それなら、今付き合っている黒髪ロングの女性はいったい、彼にとつてなんだというのだろう。

「考えてください、ぜひとも……。お待たせしました。先にオフィスに降りますね」

水道のコックを下げて水を止めた。これ以上、この話を続けたくはなかった。

砥上ホールディングスは、日本を代表する大手不動産会社だ。不動産経営を土台に、リゾートや都市開発など海外まで手広く事業を展開している。本社は四十階建ての高層ビルで、一階から三階まではショッピングセンターとレストランフロア、四階から九階までが企業向けのテナントとなっ

ており、十階から十三階までが砥上ホールディングスのオフィスフロアになる。十四階から最上階までは高級賃貸マンションとなっていて、このビルそのものが砥上のものである。

砥上ホールディングス社長、砥上一矢はそのマンションの一室を自分の部屋にしていた。つまり出勤にはエレベーターを降りるだけ、という便利さだ。

悠梨はもちろん、別のマンションを借りている。毎朝出勤前にエレベーターでオフィスの階を通り過ぎて砥上の部屋に行き、彼を起こしてから先にオフィスに降りる。わざわざ時間をずらして先に出るのは、他の社員のあらぬ誤解を招かないためだ。

砥上は国内から海外まで出張が多い。それにも、よほど必要がない限り同行はしないようにしている。周囲の誤解を避けることはもちろん、自分自身を戒めるためにも、適切な距離感を保つ努力をしていた。

本当は、毎朝砥上を起こしに行くのも控えた方がいいのだろう。悠梨もわかってはいるのだが、砥上がすっかりそれに慣れていて、いまさら放置もできない。そうしてずるずると月日だけが過ぎてしまった。

今日も分刻みのスケジュールをこなし、休憩は移動の車中、最後は取引先CEOとの会食というハードな一日が終わる。

社長付きの運転手が、このまままっすぐ帰社でいいのかと尋ねてきたので悠梨は「お願いします」と答えた。間もなく車はごくごくわずかな振動と共に走り出す。

「お疲れ様でした」

後部シートで隣に座る砥上に向けて軽く目礼すると、背中をふかふかのシートに預けた。いつもは最初の一杯ぐらいしか飲まないのだが、今夜は相手が連れてきていた男性秘書に、グラスの半分も減らないうちから酒を注がれて断りづらく、飲まされ続けてしまったのだ。

ため息を吐くと自分の息からアルコールの匂いがして、少し気分が悪い。

すると突然、横の髪を擦られたような感覚があった。

「大丈夫か？」

「え……」

「いつもより随分飲まされていただろう」

首を傾げて隣を見た。眉を顰めた砥上が、横髪を掬い上げて心配そうに悠梨の顔を覗き込んでいる。思っていたより近い場所に砥上の顔があって、悠梨の思考回路はフリーズした。

「朝羽？」

「……だ、大丈夫です。問題、ありません」

ゆっくりとした口調で、どうにか答える。心臓はとくとくと弾むように早鐘を打っていた。

——び、びっくりした……不意打ちは勘弁して。

悠梨の体調を気遣って顔色を見ているのだろうが、近すぎる。余計に具合が悪くなりそうだ。好きな男性のドアップが予告なく目の前にくれば、誰だって心拍数がおかしくなる。

「本当に？ ああいうときは、ちよつと苦しそうな顔でもして見せればいい。そうしたら俺も助け

船を出しやすうい」

「そんなわけにはいきません。大事な取引先なんですから」

「だからって無理に飲まされる必要はないと言ってる」

「平気です、本当に」

だから早く離れてほしい。そう気持ちを込めて微笑んで見せる。悠梨はアルコールが顔に出にくい質だ。そのおかげで本当になんともないように見えたのだろう。

頑なな悠梨の態度に若干呆れたような表情を見せながらも、砥上はようやく離れて正面を向き座りなおす。悠梨はほっと緊張を解くと、ぼそっと砥上に呟かれた。

「意固地だな」

「何かおっしゃいました？」

「いいや。……朝羽は、顔に似合わず案外飲めるんだな」

「童顔だからということでしたら、これでも二十七です。社会人六年目です。お酒の付き合いくらいできます」

どうせまた、色気がないだの子供っぽいだのと言われるのだ。悠梨もふいっと正面を向いて視線を逸らした。

二十代も後半に差し掛かれれば、少しは落ち着いた大人の女性に見られるようになるだろうと思ったら、残念ながらこの三年、童顔は変わらなかつた。砥上に限らず、からかわれるのには慣れている。

「たくさん飲むようには見えないと言いたただけなんだが」

「色気がないだの堅物だのお子様だの、散々言われてきたものでつい」

おかげ様で、砥上に近づきたい女性たちからは『あなたが秘書でよかつた』と安心される始末。仕事の邪魔をされなくて助かるが、非常に複雑だ。

心の中でこっそり拗ねていると、くつくつと喉を鳴らすような声が聞こえて、ふたたび隣に視線を向ける。砥上が肩を揺らして笑っていた。

「堅物には同意だな。男の気配もない。たまには息抜きくらい……」

「仕事が忙しくて遊ぶ余裕もないんです！」

本当に余計なお世話だ。仕事をしていれば砥上の側にいられるし、最初に比べて今は彼の助けに多少なりともなっているはず。

それに、その仕事が忙しいのは返せば砥上が忙しいせいだ。男の気配がないのは好きになってしまった人物が砥上だからだ。それなのにその本人に男の心配をされたものだから、腹が立つてついうっかり口を滑らしてしまった。

「それに、好きな人くらい、いますからー！」

言い切ってから、しまったと後悔した。慌てて口を閉ざして俯く。

まさか自分のことだとは思わないうが……またからかわれる材料を提供してしまった。

しかし、あるはずの砥上の反応がない。笑い声も聞こえない。

そつと顔を上げてみると、砥上はこれ以上ないほど驚いた顔をして悠梨を凝視していた。

「なんですか、その顔。私だって人並みに恋愛くらいします」

酷い。あんまりだ。砥上に恋愛すらしない女だと思われてる。

腹が立つのと恥ずかしいのとで、悠梨の顔が真っ赤に染まった。呆けた顔をしている砥上を睨み、口を真一文字に結ぶ。彼氏がいると言ったわけでもないのに、ここまで意外そうな顔をされるとは。さすがの悠梨もムツとして唇を尖らせた。

「それは知らなかったな……誰だろう？」

「言うわけありません」

「ということは俺が知っている男かな」

「だから、言いませんよ」

よほど意外だったのか、砥上はやけに食いついてくる。悠梨は少しでも距離を取るように、お尻を横にずらしてドアへと身体を寄せた。

砥上の表情が、驚きから意地悪そうな笑みに変わる。とてつもなく、嫌な予感がした。

「もう、いいじゃないですか。それより、明日のスケジュールですが」

「明日のことは明日に聞く。それより、少し付き合わないか」

「は？」

ぴよんと会話が飛んだような気がして、間拔けな声と顔を隣に向けた。何に付き合えと言うのか。砥上がひじ掛けに片腕を載せ、首を傾げて悠梨を見つめる。その仕草がまた男の色香を空気に滲ませていた。

「飲みに行こう。俺は少し飲み足りないくらいだった」

「え、い、今からですか？」

絶対、これ、からかう気満々だ。

「それほど遅くならない。最上階のバーがあるだろう」

「え、えええ……」

最上階のバーといえば、砥上のオフィスビルの最上階にあるバーのことだ。確かにどうせ一度はオフィスに戻るつもりだったため、他の店に誘われるよりは時間もかからなくていい。しかし、これ以上この話を深追いされると、ポロが出る。それが問題だ。

「プライベートで飲まれるなら、彼女に連絡されたらいいじゃないですか」

好きな男に他の女性を誘えと促すしかない自分の恋心が、少し情けない。普通に誘われたなら、コソコソ喜びながらも秘書の顔をして、素直に受け入れられたのに。今の状況からだと言えない。話題は悠梨の『好きな男』に限定されてしまう。それは絶対に、避けなければ。

砥上の今の恋人は付き合ってから半年ほどじゃなかっただろうか、と悠梨は記憶している。黒髪ロングの綺麗な人だ。一度砥上を訪ねて来て、会社の近くで悠梨も会ったことがある。年は悠梨とそう変わらないだろうが、落ち着いた雰囲気的女性だった。

いつもそうだ。砥上の恋人は、髪型や顔立ちは様々だが、淑やかな大人然とした女性ばかり。そういうえば背も高い人が多いだろうか。どこまでも悠梨とは正反対のタイプばかりだ。つまり、そういう女性なら食指が動くことだろう。

ツキンと胸が痛む。しかし、今回もまた、長くは続かなかつたらしいと砥上の返事で知った。

「別れたよ。半月ほど前かな。だから、残念ながら今は誘える相手がいらないんだ」

「えっ、そうなんですか。……それは寂しいですね」

砥上が振られるのはいつものことだ。女性からすれば、結婚を望まない砥上の態度から将来が見えずに不安になるのだろうと大方の予想はついた。

もつと言えば、砥上自身が、女性の方から離れていくように仕向けているのではないかと悠梨は疑っている。

いつも通り様子が変わらない砥上に安堵して、それから自己嫌悪した。だからか、素っ気ない声しか出なかった。

「もう少し同情してくれないか、振られたんだ」

「傷ついているようにはお見受けしませんでしたので」

ちらりと砥上の横顔を確認すると、薄っすらと口元に笑みを浮かべている。むしろ、彼女は大丈夫なのかと、そちらの方が心配だ。

「飲めるならたまには付き合え。傷心男の愚痴くらい聞いてくれてもいいだろう？」

「振られて愚痴なんかおっしゃったことありました？」

いつだって、別れても憔悴することなく、こちらが気付かないくらい自然に仕事を熟しているくせに。

本当は愚痴を言いたいのではなくて、悠梨に吐かせたいに決まっている。好きな男が誰なのか。

横目で砥上を睨んだが、やはり楽しそうな表情を変えない。今夜の酒の相手は悠梨、と彼の中では決定事項なのだろう。

「……わかりました、少しでしたら」

こういう表情のときの砥上は、何を言っても聞かない。それをよくわかっている悠梨は、がつくりと項垂れる。酔ってはいないと平気なフリをした手前、逆に断ることもしづらくなって仕方なく頷いた。

このバーに客として訪れたのは、悠梨は初めてだった。至急の伝達事項があり、すでに退社してここで飲んでいた砥上を追って、足を踏み入れたことは何度かある。そのときには、彼の隣には自分ではない女性がいたわけだが。

「すごい眺め……！」

壁一面がガラス窓になっており、夜景がずっと遠くまで広がっている。今宵は天気がいい。少し欠けた白い月が正面にあり、自分が月と同じくらい高い場所にいるような錯覚に陥ってしまう。

「初めて来たわけじゃないだろう？」

「こんな風に客席に座ったのは初めてです」

バーカウンターではなく、窓に向かって据えられたゆったりと幅広いソファに座っている。ふたり掛けなのだろうが、砥上とふたりで座っても圧迫を感じない程度の空間はとれるくらい余裕があった。

窓との間に膝より少し上の高さのローテーブルがあり、そこに淡いピンク色のカクテルが置かれている。砥上の手には洋酒のロックグラスがあり、揺らすたびにカランと氷が音を立てていた。

とても、様になっている。砥上を時々盗み見しつつ、悠梨は正面の夜景に見惚れるフリをしていた。どうしてこんな状況になったのだろう、と緊張に震える手を膝の上で握りしめながら。

てっきりバーカウンターに座るのかと思っていたのだ。それならバーテンダーも近くにいますからこんなに緊張することもなかったのに、どうしてテーブル席なのだ。

カウンターと違い、隣の席とも距離がある。話し声は多少聞こえるが、店内にはクラシック音楽が流れていて、会話の内容までははっきりとはわからない。雰囲気として、まるで恋人同士がふたりきりの時間を楽しむような空間だった。

「で、今回は一体どうやって振られたんです？」

先手必勝とばかりに砥上の失恋話を切り出した。ついでにこの妙に色気のある雰囲気も振り払えることを祈って。

「ん？」

「結婚を迫られて冷たく接したりしたんでしょう」

大会社の御曹司でこの容姿だ。一度恋人として手に入れたなら、なんとしてでも結婚まで持ち込みたい、そう恋人が願っても致し方ないだろうと思う。

「冷たくしたつもりはなかった。結婚をほめかされたから、その気はないと言った。納得してくれていたと思ってはいたんだが……そうではなかったようだな」

砥上が弱ったように顎を片手で撫でる。

「やっぱり結婚してほしいって？」

「いや、ほかに好きな男ができたと言われた。その男と結婚するらしい」

なるほど、だから砥上は振られたと表現したのだろうが、悠梨からすればそうは思えなかった。彼女はきつと、砥上に止めてもらうことを期待したのだろう。賭けに出たのだ。

砥上は、それにどう対応したのだろう。そこはかとなく嫌な予感を感じたが、仮にも半年付き合った女性からの三行半だ。普通なら少しは慌てるどころだが……

「で、彼女になんて言ったんです？」

おそろおそろ尋ねる。

もしかすると、一見そうは見えないが実は応えているのかもしれない。だから珍しく悠梨を飲みなどに誘ったのだろうか。恋人に去られて落ち込むような、人間味のある一面を見てみたい気がする。しかしその反面、他の女性のことでは傷つくところは見たくもないと思う、複雑な心境だ。しかし返事は、大方悠梨の予想通りだった。

「結婚式にはうちの会場を使うか、と聞いたら殴られた」

砥上の自社ビルには、結婚披露宴などに使えるイベント会場もある。どうやら、そこを使って式を挙げるかと聞いたらしい。

悠梨は半目で砥上を見る。彼はひょいっと肩を竦めてから、グラスに口を付けた。やはり見た通り大して弱っていないらしい。黒髪ロングの彼女への同情が生まれた。

「殴られて当たり前ですわ」

頭痛を覚えて、額に手を当てた。予想はついていたものの、これは酷い。せいぜい『お幸せに』とかその程度だろうと思っていたのに。

「そうか？ 何かと融通してやれるんじゃないかと思っただけなんだが」

「ですから、そういうところがですわ……」

祝いがわりにとでも言いたいのだろうか、違うのだ。彼女は止めて欲しかったのだ！

説教してやりたいところだが、そのことに気が付かない人ではないと悠梨は思う。彼はもしかして、わざとそんなことを言ったのだろうか。

穏やかな微笑みを浮かべた横顔からは、何も窺えなかった。グラスを手にとったりとソファの背もたれに身を預ける。スーツを少しも崩さないままだが、足を組んで居住まいを崩しているところに、彼が仕事よりも少しばかり気を緩めていることが見て取れた。表情も若干、柔らかない。

いつもよりも余計なことを言ってみてもいいような気がした。

「彼女はきつと、社長の気持ちを試したんですよ？ わかっているんですよね？」

そう言うと、窓の方を見ていた砥上の視線が悠梨に向けられた。次の答えがあるまでのほんのわずかな間、視線が絡まった。とくん、とひとつ胸が高鳴る。それを始まりに、心臓が徐々に鼓動を速めた。

「そうかな、気付かなかった」

「嘘ですよ」

「そうだとしても心が動かなかったから仕方がない。それに結婚はしないと俺は最初から言っている。不実なこととはしていないつもりだけだな」

確かに、それはそうらしいのだが。これまで付き合ってきた恋人たちとはいずれも、最初から結婚はしないという前提であつたらしいし、悠梨が把握している限りではふたり以上同時進行ということもなかった。

いやしかし、それを誠実ととらえていいのだろうか。唸りながら悠梨は正直に言った。

「何が、とは上手く口では言えないのですが、腑に落ちません……」

「そうか？」

眉根を寄せる悠梨を、砥上はくすくすと笑いながら見つめる。見られている、と感じるたびにさつきから胸の鼓動がうるさくて、息苦しくなる。

だから、微妙に視線を逸らしていた。まっすぐ顔を見るのではなくて、少し耳の近くを見てみたり、視線を落としてネクタイの模様を睨んでみたり。

「大体、どうして社長は結婚しないんですか」

選び放題、引く手数多の優良物件がいつまでも独り身だから、泣く女性が増えるのだ。やはり彼は、さつさと誰かひとりを決めるべきだ。

「結婚したいと思う人に出会ったら、すると思うよ」

「え、そうなんですか」

意外だった。彼は、結婚はしないと決めているわけではないらしい。

「そうだが？ 絶対結婚はしないと言ったことがあったか？」

「いえ……あれ？ でも、そう宣言してから付き合っているんですよ？」

「最初に宣言しておいた方が無難だからな。何度かごねられてね、凝りてる」

「ただの予防線ってことですか？ そのうち、もしかしたらその気になることも？」

「どうだろう……そもそもその気になることがあるのか、想像がつかないな」

お酒のせいだろうか。悠梨の突っこんだ質問に、砥上も意外と素直に答えてくれる。

結婚する気になるかどうか、出会った相手次第ということか。じゃあ、とっくに会って恋愛対象外の認定をされている自分には、とうてい無理な話ということか。

そのことに気が付いて、ずずんと気分が落ち込んだ。とっくに諦めているから早く結婚してほしいなんて思っていたが、どうやらほんのちよつとまだ望みを持っていたらしい。それがたっいま、砕かれてしまった。

やけ気味に、グラスをぐいっとひと息に呷る。

「朝羽は結構いける口なんだな」

すぐに砥上が店員を呼び、新しいカクテルをオーダーしてくれた。

さすがにこれ以上は、明日に差し支える。勢いに任せてグラスを空けてしまったが、後は新しくきたカクテルをちびちびと飲んで時間を稼ぐことにした。

ピンク色の可愛らしいカクテルの名は、『ピンクレディ』だ。あまり飲んだことのないカクテルは、ほんの少しだけ自分を可愛らしく演出してくれる気がした。

「さて、俺は白状したが」

カクテルに見惚れていた悠梨は、顔を上げるとびくっと肩が跳ねた。にっこりところらを見て笑う砥上に、嫌な予感があったのだ。

「朝羽は、その男と結婚するつもりでいるのか」

「は？ なんの話ですか？」

視線を宙に彷徨^{さまよ}わせて惚^{とほ}けてみるが、もちろんそれで逃がしてはもらえない。

「好きな男がいるんだろう。結婚を考えるくらいの相手なのか」

その男はあなたですよ。

そう言っただけでいい。しかし、もちろん言えるわけもない。玉砕してその後の関係がぎくしゃくしては、仕事ができなくなるのだから。

「違います。私のことはいいんです、そもそも付き合ってもいないんですから！」

「そうなのか。どうしてだ？ 気持ち伝えればいいだろう」

——ああ、もう、そんなグイグイ来ないでっば。

砥上にはまるきり悪気はないのだが、本人に告白を勧められるこの状況は、悠梨にとつて情けないやら惨めやら、腹が立つやら、だ。なんだか泣きたくもなってくる。

「そんな簡単な話じゃないですから」

「ああ、告白する前に周囲を固めているということか」

「……社長は私をどういう人間だと思っているんです？」

なんでそういう発想になるのか。そういう人間だと思われるのだろうか？
がっくりと肩を落とし脱力する。

やっぱり、失敗だった。社長とこの手の話をするのは、ダメーヂ必至だ。

好きな男がいるなどと、口を滑らせたりするんじゃないかな。

「朝羽が、というか女性はとかく、そういう画策をする生き物だ」

「一体どんな経験してきたんですか。そんな、裏でこそする人間ばかりじゃありませんから」
呆れてそう言ったが、砥上は納得しかねる顔をしている。

砥上の持つ社会的地位や資産が、そういう女性ばかり引き寄せたのかもしれないが、その経験から実は砥上は女性不信なのだろうか。本人も気付かない程度の。

「……まあ、そうだな。朝羽は確かに、そんなイメージではないな」

「そう言っていただけでしたら嬉しいです。そういう女性もいますので、社長も諦めずに婚活でもしてみてください」

よし、上手い具合に話を終わらせた。そう悠梨は思ったが、残念ながら簡単には逃がしてはもらえない。

「今は朝羽の話だろう。それなら告白しないのは何か理由があるのか。社内の男か？」

「好きだからって、そんなほいほい告白できませんよ！ 失敗したらとか色々悩むものでしょう？」

砥上にはそんな恐怖は縁がないのかもしれない。けれど普通は、告白というのは失敗したあとのリスクが付いてくる。

それだけ勇気があることなのに、砥上には理解できないようだ。

「失敗……振られるということか？ 相手に好きな女でもない限り、朝羽なら大丈夫だと思
うが」

「根拠のないことを言わないでください、もう」

「朝羽はいい女の部類に入る。仕事もできるし、性格も穏やかで誠実だ」

突然の褒め言葉だった。だからはじめ、その言葉の意味が頭に入ってこなくて、数秒ぼかんと砥上を見つめていた。

それから徐々に意味を理解して、顔が熱く火照っていく。少しおさまりにかけていた心臓が、また忙しなく動き出した。

「な……な、何言ってる」

「大抵の男ならOKすると思うが」

「しや、社長は私のこと馬鹿にしてたじゃないですか！」

それは、社長の秘書に決まった日のことだ。『食指が動きそうにない』と言われた。狼狽うろたえて、また余計なことを言ってしまった。これでは、傷ついてましたと言っているようなものだ。

はっと口元を押さえたが、砥上は眉根を寄せて首を傾げた。

「馬鹿にした？ 俺が？」

まさか、覚えていないらしい。

「なんでもありません、忘れてください」

「いや、これは放置できない。覚えはないが本当なら謝罪したいし、誤解なら解くべきだ」
突然、砥上の表情が真剣なものになった。グラスをテーブルに置いて、少しだけ悠梨に上半身を乗り出すようにして、表情を窺^{うかが}いにくる。

「大丈夫ですから、本当に！」

赤くなった顔を背けて隠しながら言い返すが、砥上は放置できない問題だと考えたようで、引く様子がない。

いやです、言いたくない、いやや聞かせてくれ、と言いつつ、折れざるを得なくなったのは悠梨の方だった。

「社長の好みのタイプじゃないから、私を秘書に選んだって言ったじゃないですか！」

食指が動きそうにない、という言葉は生々しくて使えなかった。やけくそのようにそう言つて、悠梨は砥上を睨みつける。

本当にこの人は酷いし無神経だし、もうなぜ好きになったのか、悠梨は自分でもよくわからなくなつてしまった。

砥上は驚いたように目を見開いたあと、不思議そうに首を傾げる。

「俺の好みのタイプだけがいい女の条件ではないと思うが」

タイプじゃないけど、いい女だとは思つてくれているらしい。それなら少し嬉しいような……でも、好きな男が砥上なのだから結局希望はない。

喜んでいいのか悪いのか。

「どんな男だ？ 会社の人間なら」

「普通の人です、ごく普通の！ お願いですから、仲を取り持とうとか言い出さないでくださいね！」

もうしつこい。どうしてこんなに食いついてくるのか。

泣きそうになりながらも砥上の追及をスルーして、カクテルに手を伸ばす。ちびちび飲んでいるうちに少し温^{ぬる}くなつてしまった。

「しかし放つてはおけないだろう。可愛い部下の相手になる男なら……」

あなたは私の恋愛を管理するつもりですか、自分の起きる時間も管理できないのに!?

「放つておいてくださつて結構です、かまう方がおかしいですから！」

「真面目な朝羽のことだ、変な男を相手にはしないとあなたが……」

砥上はどうやら本当に心配しているようだが、『あなたのことです』と今すぐ目の前の男を指さしてやりたい。

うっかり涙目になつてしまふぎりぎり、唇を噛みしめた。ふたたび強く睨みつけると、一瞬砥上が目を見張る。

その表情を不思議に思ったが、それよりも今は羞恥心と滲^{にじ}み始める涙を堪えることの方が忙しかつた。

「相手は普通の人ですが！ 選ぶ女性が社長の好みと似通っているので、私では望みがないんです！」

だからもう、この話はおしまいにしてください！
 そう目に込めていたのだが、砥上の表情は時間が止まったように動かなかった。こくりと息を呑んだ気配さえする。

「社長？」

首を傾げると、今気が付いたように表情が動いた。

「ああ、いや。ついむきになってしまった。朝羽にまさか好きな男がいるなんて想像すらしてなくて」

「酷いですからね、それ」

悠梨に迫ってきていた上半身がようやく離れ、ほつとする。またソファの背にもたれた砥上は、もういつもの表情に戻っていた。

それにしても、そんなにも男つ気がないと思われていたのだろうか。間違っていないがあきらかにそう見えるのだろうか。だとすればショックだが、よくよく考えなくてもすべて砥上のせいなのだ。身近にいる砥上が、極上すぎるから。さつさと諦めて他の恋をしようにも、仕事が忙しすぎてそんな時間もまったくない。

「私だって諦めてさつさと婚活でもしたいですよ」

元凶にいいようにはからかわれ、すっかり拗ねてしまった悠梨はつつけんどんに言い放つ。すると砥上は意外そうに目を見開いた。

「諦める？ 何もしないうちから？」

「だって無理ですし」

「わからないだろう。似通っているといても所詮見た目のことじゃないのか？」

「えー……つと、はい、まあ」

返事のしにくい質問をされて、言葉を濁す。

砥上の過去の女性のことなので、似通っているも何もないのだが。

これまで見たことのある砥上の元恋人たちは、外見や醸し出す雰囲気共通点がある。しつとりと濃密な色気の漂う、洗練された女性。髪は長い人が多い。

「外見のイメージは似せていくことはできるだろう」

「いや、そんな、無理ですって」

「外見なんてとっかかりだ。ようはきっかけがそれでつかめれば、後は内面だろう。そこからは朝羽次第だろうが」

反論する言葉が出ない。なかなかいいことを言ってくれる……と思ったが、その女性をたくさん振ってきた砥上自身が言っているところが微妙だ。

彼は悠梨から少し距離を取るようにひじ掛けに凭れかかり、悠梨の顔から足元まで視線を巡らせる。案外、真剣な目で。

「まあ、確かに背の高さはヒールで多少誤魔化すしかないが」

言われなくても知っている。社長の好みは長身美女、自分は平均より低い。

「あんまり高いヒールなんて仕事にならないので履きませんよ」

「ああ、それもそうか。いや、肩が華奢だし全体がほっそりしているからか、実際の身長よりは高く見える。別に悪くない」

砥上の視線に晒されて、じわじわと汗が滲み始めた。

——どうして、こうなった。なぜ今、砥上の基準で女としての判定を受けているのだろう。しかも架空の好きな男のために。

「雰囲気はどうにも幼いのが難点か」

「余計なお世話ですっ！ もうやめてくださいいいい」

社長の馬鹿。意地悪、無神経。女たらし！

頭の中で思いつく限りの悪態を並べて、ちびちび飲むはずだったカクテルをまた一気に飲んでしまった。

その後、何かと会話の隙については悠梨の好きな男のことについて聞きたがるのを全部無視して、ようやくバーを出ることになった。

そこでなぜか、砥上がいつもとは違う行動に出る。

タクシーで帰るだけなのに、家に着くまで同乗して送ると言い出したのだ。仕事で遅くなっても、会食で酒が入っているときでも今までこんなことはなかった。

危ないからタクシーで、と言うだけだったのに。

「本当に大丈夫ですから」

「いいから。ほら」

タクシーに乗り込む際、うしろの腰の辺りに大きな手が添えられ、まるでエスコートでもされているようだった。

——何か、いつもと扱いが違う。

訝しく思いながらも、促されるままタクシーに乗る。砥上も後に続いた。本当に家まで送るつもりらしい。

もうタクシーは走り出してしまったのだから、仕方がない。腕時計を見ると、もう十一時になるうとしていた。

バーで、話しすぎてしまった。

少しでも休んでいただいて、明日も元気に働いてもらう、それが悠梨の最優先事項だ。なのに秘書をからかって遊ぶという無意味な時間を持たせてしまうとは。

思わず深々とついたため息を砥上拾った。

「疲れたか？」

「疲れているのは社長です。少しでも休んでいただきたかったのに」

「朝羽はそればかりだな」

砥上は呆れたような笑い声をあげた。

「それが私の仕事です。社長は大事なお身体なんですからね」

もちろん、そればかりではないが。大抵のことにおいて優秀な彼は、特に人の助けを必要とすることがない。だから寝起きのサポートと睡眠不足をなくすることが最重要なのだ。事業で大事な局面

を、彼は人に任せることをしないから。

いざというときに、彼が身体の心配をすることなく仕事に赴けるように。本当なら、健康管理もしたいところだが、ただの秘書がそんなことをすればその時々恋人がきつといい顔をしないだろう。

時間にして十五分ほど走ったところで、タクシーが止まった。悠梨の住むマンションの、すぐ目の前だった。

秘書になって、少しでも会社に近い場所にといい、引越したのがこのマンションだ。十階建てのマンションはまだ築浅で外観も内装も小ぎれいで住みやすい。土地価格が高い地域なので、単身者用の1LDKだが家賃も結構高い。基本給が上がったのでどうにか払えている。

タクシーの運転手に待つように言い、砥上が先に降りた。続いて悠梨が降りようとすると、ふいに目の前に砥上の手が差し出された。

「え……？」

驚いて顔を上げると、目の前に腰を屈めた砥上がいる。

「あ、あの……」

「ほら、早く」

外灯に照らされる怖いほどに整った微笑みは、夜空に輝く月のように見えた。圧倒されて素直にその手に自分の手を重ねてしまう。

「あ、ありがとうございます」

手を引かれてタクシーを降り立ったその後も、手はなぜか離れなかった。

「あの、今日はすみません。送っていただいてしまって」

もう三年も一緒に働いて、傍にしていることには慣れているはずなのに。今は彼をどうしても直視できず、俯いて視界から外した。

触れている手が汗ばんできて、恥ずかしい。けれど自分からその手を引っ込めることもできず、困っていた。

「今夜は飲ませ過ぎてしまったが、大丈夫か？」

「平気ですよ。明日もちゃんと起こしに伺います。寝坊して遅れるなんて無様なことは致しません」

すました声でそう言うと、悠梨の頭上でふっと息が零れるような音がした。笑ったのだ、とつい何気なく顔を上げた、そのときだった。

「感謝しているよ、毎朝」

きゅっと指先に力が込められた。自分の手が持ち上がり、変わらず微笑を浮かべたままの砥上の口元に寄せられるのを見る。

「ありがとう。君がいなければ俺は朝も起きられず、会社はとくに傾いているかもしれない」

そう嘯きながら、悠梨の指先に砥上の唇が触れた。触れた瞬間、わずかに砥上の唇が動いて悠梨の指先を擦っていた。

まるで、映画のワンシーンのようだ。悠梨は、声を出すこともできなかった。

指先へのキスの間、閉じられた彼の顔を縁取る睫毛を見つめていた。すると不意に開いて視線が絡み、悠梨は息を呑む。

「いつも俺のことばかりだが、君もちゃんと休みなさい」

その言葉と同時に、頬に温かな手が触れて肩が跳ねた。親指がついと目の下を撫でる。それが砥上のもう片方の手だと気付いたときには、すぐに離れていってしまった。

「じゃあ、おやすみ」

捕まっていた手も解放されて、砥上はふたたびタクシーへ乗り込んだ。

お疲れ様でした、と頭を下げて見送らなければいけないところだ。けれど悠梨はぼうつとしたままどうすることもできず、我に返ったのはタクシーのテールランプが見えなくなってからだった。息を詰めていたことにも今気が付いて、大きく息を吸う。

「なっ……な……」

—— 一体、何が、起こったの……！

第二章 手の口づけは、始まりの合図

アルコールに多少酔っていたのもあって、余計なことを言ってしまったという自覚は十分にある。しかし、ちよつと好きな男がいると口を滑らせただけで、あんなに食いついてくるとは思わないではないか。質問攻めにあつて辛くなつて、だからあんなことを言ってしまったのだが。

『好きな男と砥上の、女性のタイプが似ている』

……本当に、くだらないことを言ってしまった。

「朝羽は、どうしていつもパンツスーツなんだ？」

砥上の執務室は二部屋続きだ。入口側の部屋に悠梨専用のデスクがあり、ここを通らなければ奥の砥上のある部屋には行けないようになっている。

裁可の済んだ書類を受け取り、自分のデスクに戻ろうと会釈したときだった。突然そんなことを言われて、頭を下げた状態のまま眉を寄せた。

……パンツスーツでは、何かまずかった？ けれど今日は特別な業務もない。午後からも服装を特定するような会食やパーティーがあるわけでもないし。

「動きやすいです。この方が好きなんです……何か問題でしょうか」

何か理由があるのかもしれない。そう思い、顔を上げて尋ねたが返事はやっぱり仕事には無関係だった。

「朝羽はスカートが似合うと思う」

意味がわからない。

「何を言っているんですか、突然……仕事に戻ります」

仕事が忙しすぎて、集中力がなくなっているのだろうか。息抜きする時間を、どこかで取っていただく方がいいかもしれない。

そう考えながら背を向けて、元の部屋に戻る寸前、また声をかけられた。

「スカートの方が好きなんだ」

「それに合わせるというならセクハラです。労務に相談しますよ」

呆れて振り向くと、砥上は意味ありげに笑っているだけだった。

一体、どういうつもりだろう。

自分のデスクの前まで来て、そこではたと昨夜のことを思い出した。

「……まさか。自分の好みを私に教えようとしているの？」

馬鹿にしている。

腹立ちまぎれに勢いよく書類をデスクの上に載せ、椅子に腰を落ち着けると仕事を再開する。

砥上は元々人を楽しそうにからかうことはある。昨夜の別れ際の、指先のキスなどまさにそうだろう。が、こんなにしつこいことはない。

「そんなに、私に好きな人がいることが印象強かったのかな」

昨日の話など、一晩たったら忘れていたと思っていた。

※※※

その内仕事の忙しさに紛れて忘れるだろう。そう思っていたのに、その予想は外れた。

基本は、いつもの砥上だ。業務を悠梨が組んだスケジュール通りに淡々とそつなくこなす。だが、

一日の業務をほぼ終えたときだった。

「社長、もうじきホテル東都グランデの高柳様たかやなぎが来られる予定ですが」

「ああ、ここで少し話を詰めて、その後は出かける」

「でしたら、それまで待機しております」

高柳は、砥上の個人的な友人でもある。仕事の話が終われば、ふたりにでも行くのだろう。いつものことだ。

お茶の用意をして、ふたりがここを出るまでを見送れば、悠梨は退社という流れか。

「食事に出られるのであれば、どこか押さえておきますが」

多分そうなるだろうなどと、砥上の名前を出せばすぐに予約できる店をいくつかピックアップしてある。

「……そうだな。朝羽は、今日は？ 夜は予定があるのか」

立ち読みサンプル
はここまで

「はい？ いえ、帰るだけです」

なぜそんなことを？ という疑問は、すぐに晴れた。

「では三席、予約を頼む」と、砥上が言ったからだ。

「……え。私も同行ですか？」

「用はないだろう。別に接待しろとは言わない」

「そんなわけにはいきかないですよ、高柳様に失礼じゃないですか」

「構わない、気にするような男じゃないしな。朝羽は食事だけして先に帰ればいい。後は勝手にする」

正直言うと、昨日の夜は遅かったのだから今日は早く帰りたい。

しかし本当に、隣で食事するだけでいいと言うのなら。いや、ここは社交辞令と受け取って辞退するのが好ましい、けれど。

「店も、朝羽の好きなところがいい」

ここで、ぴくつと悠梨は反応してしまった。

「……本当に？ いいんですか？」

「ああ」

「食べたら帰りますよ？ 失礼のないようにタイミングは見ますが」

「それでいい」

悠梨の心が揺れたのを察して、砥上がにやりと笑う。なぜ急に誘ってきたのか悠梨にはわからな

いが、美味しい食事だけ食べて帰れるならラッキーだ。

砥上を使う店は、どの店も超一級品の味だ。緊張する会食などでなく純粋に食事を楽しむのは

嬉しい。

「じゃ、銀座の鶯月にします」

「ははっ、遠慮がないな」

「あの店なら間違いないじゃないですか。高柳様のお好みとも合いますし、私も大好きです」

「ああ、そこでいい」

スマートフォンのアドレス帳で店の電話番号を探していると、視界が少しだけ陰る。そういえば、今の砥上の声はすぐ近くのように聞こえた。

手元から顔を上げる。すると、すぐ傍に彼は立っていた。

「社長？」

距離が近いことは、特別珍しいことではない。三年も秘書をしていれば、日常の中で肩や腕が触れたり、資料を覗き込むのに顔を近づけたりすることもある。

だけどこの距離感には『おかしい』と感じた。いつもと違う。砥上の目は、真直ぐに悠梨の目を見おろしていた。近すぎて、背の高い彼を大きく首を動かして見上げる。

「あの？」

なぜか昨夜の、指先へのキスを思い出した。平静を装おうとしたが、上手くいかない。頬が少し強張っていた。